

剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。

学院長 嶋 田 順 好

「想定外」という言葉を、最近は頻繁に聴かされます。東日本大震災とそれに伴う人類史上最悪の事故とも言える福島第一原発に関わる報道でもこの言葉は頻出しました。今年になっても平成 30 年 7 月豪雨による未曾有の洪水や土砂災害、台風 21 号の高潮による関空滑走路の冠水、またその猛烈な風に流されたタンカーによる関空連絡橋の破壊、さらに北海道胆振東部地震における苫東厚真発電所停止がもたらしたブラックアウト事故等でも用いられました。

「想定外」という言葉が、当然果たされるべき人としての管理責任を見逃すために安易に用いられてはならないことですが、強力化する台風や集中豪雨の背後に、地球温暖化による気象変動の影響があることは否定できないことでしょう。その結果「想定外」のことが日常化する「異常」が生起する時代となってしまったに違いありません。これまでエネルギーを惜しげもなく用いて便利で快適な生活を追求し続けてきた人類が、今まさに自然からしっぺ返しを受けていると思えてならないのです。

北海道のブラックアウトで思い起こしたのは、1975 年に出版された堺屋太一氏の『油断!』です。石油エネルギーという観点から、日本の脆弱性をまざまざと思い知らせてくれた最初のシミュレーション小説でした。内容は中東で戦争が勃発、石油輸入が完全にストップし、備蓄が十分でない日本が壊滅的な危機に陥っていく状況を描いたものです。

今回の全電源喪失としてのブラックアウトは、中東での戦争ではなく地震が原因でしたが、都市機能は麻痺し、産業活動は停止し、生活そのものが立ち行かなくなりました。幸い地震から 2 日後に、ほぼ全道で停電状況は解消されましたが、それでも大きな被害が出ました。もし真冬にこの事態が生起したら短期間のブラックアウトでも少なからぬ人々が生命の危機にさらされることになったに違いありません。東日本大震災の時にも痛感させられたことですが、私たちが日常としている便利で快適な生活の基盤が、どんなに脆弱なものかということをもざまざと見せつけられた思いがしました。

インターネット上のハイパーテキストシステムをワールド・ワイド・ウェブ (www)、すなわち「世界大の蜘蛛の巣」と呼びますが、言い得て妙の表現で高度産業社会では情報通信に限らず、すべての産業、家庭生活が、繊細、緊密、複雑、膨大なネットワークの集積で結びつけられていると言えるでしょう。それだけにそのネットワークを動かす電源の喪失は、一瞬にして私たちの生活の一切を麻痺させ、停止させ、破綻させることになるのです。大都市圏へ人口が一極集中し、ひたすら効率化、組織化、合理化を追求して築かれた高度産業社会の持続可能性に関する脆弱性、傷つきやすさがぱっくりと口を開けているということではないでしょうか。

今回のブラックアウトの事実を知らされた時、ステルス性のある高精度の潜水艦発射巡航ミサイルで日本各地の発電所（ことに原子力発電所）が攻撃されたら、核攻撃を受けるまでもなく、それだけで国民生活は崩壊してしまうのではないかと思わずにはいられません。兵站を無視した無謀な作戦によって多くの犠牲者を出したインパール作戦同様、防衛力ということで兵力に関する攻めの議論はなされても、国民の兵站（避難と補給）に関する守りの論議が一顧だにされていない現状を考慮する時、そこには根拠なき楽観があるのではないかと感じてなりません。

一見快適に便利な暮らしをしている私たちの生活基盤が、「砂の上に家を建て」（マタイ 7 章 26 節）ているような脆弱性に依っていることを真剣に思いめぐらすとき、「傷ついた葦を折ることなく／暗くなってゆく灯心を消すことなく／裁きを導き出して、確かなものとする」（イザヤ書 42 章 3 節）統治の重要性を思わずにはいられません。それは自ずと終末論的な平和のヴィジョンにもつながります。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない」（イザヤ書 2 章 4 節）との道を求めていくことこそが、悲劇的な想定外を招かないためにも極めて現実的な選択肢ではないかと思えてなりません。